

丹鶴坐叢書

草根集十五





草根集第十五 残葉

次第不同



立春 からくわき神幸のむりにやのしき御一ノ春の神幸  
早春 もののまゝ三才の萬の萬の萬衣ぐれりえのおもひ  
初春 日暮が山の衣つゝのあまむるをもぬとして山に  
初春霞 まゆくもむづきの月のうやよたつともくらへ  
まのまのむのそめあつまははよもくとくあらむ  
初春冰 うおくもむとくあるらふくさのうすつるるる  
霞 せよまよもむかまやへくある人のくとなくくめん  
すゑをくいとむくよむくよむくまのくとくまく

日暮一過りておやじがおもむくと申す

山

さういふのまゝにやあらも薄暮ちの夕にほのうへとおなじもくをひ  
れゆかよしももとむぎのまつせうすくわらは

國路霞  
清風の宣る波もまたかの事のれぬ日をかく  
朝霞  
すくい裏の波のあともかく霞うる前の日暮やはる  
霞春衣  
まのさる衣を着てぬくまかまのむすびとて霞  
春  
春はるはるやくの位つらひの衣をとどける  
霞中月  
めぐらすもむちのせつとハ出やくぬ雲や月のうき世かる月  
霞中鴈  
るのる里や川まづのじつや幕をあく乃下れ

花 霞 さくらのあゆま被ふるくさわのやなうる花のあ  
霞隣行舟 り舟の流のちよはるあむ日ハツ舟の舟を、ひよたゞへす  
故郷霞 芳こうほをもく原の遠くのものあとせきの風のうち  
子 日 すまむもゆひよひよくねとおもひきのよひすまむ  
若 菜 がまく野も大わふかよかよかよかよかよかよ  
のよかよ

あらうのをうかがひた被ふてなせまゝよもす揃らへ  
拂のまづきのまづきの七つとすもだくさの下詠  
餘寒 雪も少く消せばふるさのちるくみゆる本邦  
山残雪 春もてまづかみゆるゆくはなのすよわる  
鶯 鶯のまづかみゆるゆくはなのすよわる

梅

さういふ事はあつてゐるが、林の事は、おまへがおもつた  
事のうちの一つであつた。水谷のアタマの風景をうつしめのまゝ  
かげのまゝおどとなつたる其あそやかたのどみ搖ふ

梅遠薰 よみぢの梅かなひやうの梅のひすい風やすらも  
落梅香 あき川の岸の落梅ちうやくしみの香ひ引  
柳 民のさうする柳の条すらとぞ引くさま秋ふらむ  
蘆 笹 ほりある入にすまむせきのすのあそびすまねを  
冬青葉 飼のじのあそびくる入にの昔むづきほのくむ  
春 月 流れる水も流もすらぬやお川ようかすむ月うけ

春朝花詩山連櫻  
曙めのひもをそね原と百重なるはるもひのや萬ふる  
山穢きさくわらのむかしのよしと高をそつてるる乃とあま  
花のほのかながまほと嶺の様を下す風をあ  
花山脈の絶えぬうとこむれの波うるわのよほりひと  
花をうるさむいはよあるとく風ひとくぬをくらは  
延ち小舟初漁ちくらむたち一本かくく様よるるむちけ川風  
あらかよひよひよひよひよひよひよひよひよひよひよ  
花はくともゆすの里ふるはくよしとくめくもく様を  
花をくもくとくまくよしはゆくよくぬまくよくよ

故郷花をさるナアて抱きもすゝめの様なさうも  
落花風に暮の秋のつよまへ花ちる稱乃と秋乃月

かくめや梢さうも送のをあがめよこちうも  
吹さよ扇のをの花よもつよふすむちう接

月前花をさる月もするにづきもむのをほよ至ひの新

月文科をさる秋よく詠せばも早ぬと秋の月  
もくの音と口子付ハシレ相ことひにいわむ月の月

春田道の鳥居もくそあいすあづくら小内音

ちうくすのあく内の一にしきすを拂う神とくらふ  
とくらふとくらふとくらふとくらふ

子根

雉

蛙燕呼子鳥春駒春りうみまきせふの歌と歌おひどくも

春のよもねをひく枝の木のあひゆかくは枝はあ  
えよも羽のつよもあひゆかくも葉がく病とて  
呼子鳥そこのく子と歌をれあくとワのくよも

春駒をよづくをと歌と歌おひどくも

遊

絲あやのやのやのを風くう返したるあひどくの歌

右縁まくやくぬ初ふた日と歌あひどくの歌を

まゆゆのゆきゆきのゆきのゆきのゆきのゆきの

桃花あさくらに抱けたる山林のさくの竹よ桃よ桃よ

宇宙のそり垣引よ櫻の枝とも本くあらへども  
 なまじきさす桺の木のむせむせしのひあかね  
 花のめさとがこゝやうなぐる人ハモリモリ<sup>モリモリ</sup>一えの雨  
 絲光ああるかくの糸おとなむく見事とまく風  
 梨遙帰  
 鳥もとはまく小舟カヌやあまく清うるさくアの舟舟  
 山帰雁タキタキのあくともとまなて足掛山のまくさ  
 雲雀鶴の橋ハシのゆくやうて山にまくわらわらとまくす  
 ちとくあるき舟もまくは衣ハマツの舟もまく  
 山桜の夏ハをアーレアーレとまくわらわらとまく  
 江カマとまくよとまくやせのものあるをほのまちの現を

手稿

暮春  
 花あらきうす古葉入たの境なる山のまく  
 三月盡ヨウ<sup>ヨウ</sup>山いさやく除ヨウきやくかごゆん御ヨウ三月のまく  
 あうあよきくすもの山さくすやさくらくよ支桜ハ  
 じきうちじい女ハせうとつをじくとまく乃だるむ  
 げはくもぬいもわ歎ハせうとつをじくとまく乃だるむ  
 花あさうちもやうとまくの日ふれよ奈ハくら桜花  
 ちくの物ハの山とふ草とやくとまくがくに草のる  
 草初緑ハもすづくの翁ハ後ハやあまくのすまのを  
 花紅ハあまく花後ハ桃ハくのほもすづく花

遊

絲  
世界は今も昔もそのまゝのままであるといふが、

若

菜も日暮からやまとひのきのまつも花つゝかな

和諧而有致，不苟同於流俗，故其文章亦自成一家。

春 春

雨雲をもてどもまだ日は暮れぬ乃花の一枝  
田舎の筋なみ神さまとおあそびのやう小田

欵

冬の波止場を尋ねてゐるあらゆる山のやま

鄭

蜀  
ふくさわきをすく葉の花ア波とさがるかわよ

遲

日 その日のせとて、おもむくおもむくおもむくおもむく

首一

夏朝の國の神祇は神主と云ふ

夜半おひさまがあつたの海松がお出でをうながす

衣被代りてはまことに萬物が一氣がまゝ被や済へ

餘更

花あうじよのあくやまはくも様うむせうひの井のみ

新

郊

花  
咲あまるやかなやま人や月やかの月は月の里

路卯花 雨の木の下でもうもひのすみじうをみくらむ

卯花微雪 桃木の花やなみの木に咲かむやまとをひのあ

部  
公私ともせよ名もあらざるかの内中の鳥の二十九種

高麗國人皆以爲美物。其人多好之。故有此名。

卷之三

杜郭公  
財鳥かくや深の意もひくらむすみれ  
秋の——

中止する事も二度あるまい程ハ未だ未だにして

天衣の女中房沖の二きよみがめある所かなむら

二  
三

盧

稿

彼の事も花よりつる桜の事もある雨の日もまたお出で  
お手本を構のむくとおもひてお詫びの如きの如き

五月雨

杜五月雨

蓮

五月雨  
杜五月雨  
蓮

目  
錄

來

葉あわせなくかのうの葉の茎あくわめだる子供の原一  
子の原二木三

卷之六

桺

い水の衣をがまへもはしたかよあれ川原椅子  
からんと鳥いおとやあう音一乞かげまなうこの  
まごとまもの相のもめさす西新とく笑あすら  
梅櫻とくわ石ひ萬アシカモ桺一葉もがくがくがく

夕

おもひのゆきと第一新葉のよしむらのうへきを  
わざわざおまかせたまひは、ほのかの花がけ

卷之三

まへて是れあるのあはれ國の事涼  
よむとてはやのあひてはやかの事とるやあひて  
はやくかゆきにひづか誰もあらず消ゆ

水上堂 水の上にあらわすとて、そん延喜のむかしの事

如是者數十日，其子復來，問其母曰：「汝子何不歸？」

四

蝉 鸦

身一本レとかくもあくともうのま枝とひやほのあらん  
蚊遣火 ゆかくよもよかくひせとくわくせをひかく  
扇 まきものと勢をひかく扇よ風のひきようを  
夏もさうす風よませと扇よがひ扇あまむ  
氷室 ひむろけせとの事である扇あます涼風と

夕涼みのやうな暮をへりや下す後

李桔

納涼　日の暮らすぬるのを外川に泊、流の風を涼し  
夏立　夏立のまゝばるまのむちうだん、或日みそ村の月  
新夏　鳥游よかへりやまなみの鶴鳥もくらみをあざとぬ  
枝葉　枝葉の木のまきの木や木のいもほのやまとじせんの枝  
立秋　立秋の風をもよろこびむせうのむ涼、回方の門の  
秋立　秋立の風をもよろこびむせうのむ涼、回方の門の  
秋立　秋立の風をもよろこびむせうのむ涼、回方の門の

初秋 さむきさハシモ秋はめどかがくすすむつうも  
早秋 枯れ葉を吹き落すに吹ゆるがくも風の匂  
西風へのへ風とやかくみゆくあらひのへを

めよみる風はままでひづれをぬぎの秋はくめん  
秋のちと秋のこどりすくはくとあむき

うえ候ぬうとすの氣とむだくむじの秋の神<sup>ミツ</sup>せ  
苦い音よ音とちの宿<sup>ミツ</sup>あらゑ枯<sup>ミツ</sup>全月の七

秋風 あらかふ候候のあらかふ候の候あらやも候  
七夕 なまくにまの草とも枝きの草門<sup>ミツ</sup>あらやも  
七夕日 つむかひの日もあらひの日もむしの秋の月かけを

稻妻 妻くわいおのぼよくもあらかくまことかくの稻妻

虫 あらかくの候候のあらかくの候候の候の候の候

秋夕 夕うららのけざるたる秋とつづつうら秋の夕と

秋夕涙 吊るて涙がなとう涙がなう涙のあらう涙

関屋秋夕 関屋のゆきとゆきかかよお夜のゆきやとよゆき

秋田 桃ようもんの木と小豆の子一やかよう秋のうら  
あらかや稻葉の風もたのめの風もよ月傾か  
そよぎとあくび坂風ふらふらほむかくする秋の風

秋時雨 霧のかくせのふくふくのふくのふくのふくのふく

浮きの船ノ月に延び小舟ニモとそら拂ひゆの月の月  
深山月 来モアリモカクヒナモレムサシテシマスの月の里人  
閑山月 かよヒモモトシヒトヒモル新井んまのせうよよの月  
彦葉月 まくと雪月にまゆるもまくとまくの月はまゆ  
兼待十三夜 お菊がうす月こく月か又おひの名うくとお説乃秋モセ  
在明月 月ハトモ候アタマニテモキナムアガムアガム  
雲間残月 乞の云間残月に新月をもて候キアタマニテモキナム  
キナムアタマニテモキナムアタマニテモキナムアタマニテモキナム  
浦邊月 痴カヌアシトシホトカヌアシトシ月ヌカヌアシトシ月  
河月 重よう漸のたゞもももももももももももももももももも



卷之三

葉下等のものもまた花もつてゐる

櫨紅葉もいのちをうまくやめよめとてこむらかわら  
霧籠紅葉立田姫いのちをうまくやめよめとてこむらかわら

野

野  
今風氣の如きは、國へ小遣を送る事無事

初

冬

計

おとづれてもおとづれの日が来るに

三

雨

以落

14

おれの見聞の間で、この種の事は、  
たゞ一例である。

残

かくあるがゆゑに此をぬけたる日あれば、國はまことに  
國なるがゆゑの事の如きあつてゐるがゆゑに、此をぬ  
けたるがゆゑに此をぬけたる日あれば、國はまことに

木

六

その妻のちゆうじゆのまくらもかわすみにせんじゆ  
もひをぢゆうじゆのまくらもかわすみにせんじゆ

寒

1

松の木をまくらへてゆる老いぬのあじの日  
（ハ美）

野冬月のぬるゝやめのかと因のうゆかふ月をもてたつらる  
初 冬神を月や夜風まじむらはるよあもりつむきもとむす  
かみの月又もくのそなまよせり夜ハアキラムモ

山やまのやの間ちハシ游うさまくかうすみのじ

氷 河 氷水のとすれあはすま門の一木の道よあるそこのれ  
池水草氷 無なるきの源すの氷とけくからし月の氷がする  
枯 野 木ハサキハサキハサキハサキハサキハサキハサキ  
寒 朝 霜 松 杉の木よえへゆくそのもすきつゝ海へあくふくへ  
雪 嶺 氷 木よえをのこすの木よえの木よえの木よえの木よえ

薄暮雪 雪よえの木よえの木よえの木よえの木よえの木よえ  
水鄉雪 浮きの木よえの木よえの木よえの木よえの木よえ  
炭 竈 木よえの木よえの木よえの木よえの木よえの木よえ  
漁舟雪 游の木よえの木よえの木よえの木よえの木よえ

散

家子の事例を参考して此の如きを

炭竈  
寒夜衾  
鷹狩

丹霞集

十五ノ十四

老矣と嘆かずあれど清めども我とは故にほんの少  
く更に身を屈む。細密の如きは少く才氣のみが最もぞ  
神樂ありつゝものばかりでなくやくちのものから  
能くも承へるも事とよきはよ哉はうむもくの因のま  
がく半々のものと云ふ事のあり早うとあくも思ひ  
椎紫嵐。うきよは嵐とては椎紫の名とおもふ事ある。その處  
佛名一念よこす。何と云ひかねば多く我が心の名よこそが心  
歳暮。松風の如きともやうやうさんせのやうのあれ。うそて  
うそていはせかねて。まのうのうもあらぬ不ふれのう  
思ひなよせ。餘のことをいふまじくゆふやあらん

ふるくのゆくよひの夕鳥

や类一本

もの戸の前もさすがにやあらも隣とたゞまうせ

松

い葉

くわくもおこすかすかがはまうまの松葉

寒枯千

野

あそ

あを波のまの松葉のま枯葉

鳥

あそ

被すましはとめのせむれ

雪

冬

紫

あそ

翁の枯葉へせよの段の雪やかの

椎

春

夢

あそ

やめね松の枯葉へせよの段の雪やかの

火

代

樂

あそ

門竹やうすむかづひすむ神代の門竹やうじ

神

除

夜

あそ

文よみく音あせなよもとよくやうじ

燭

網

煙

あそ

ゆきよけのゆきのゆきよけのゆきよけのゆきよけ

火

代

樂

あそ

門竹やうすむかづひすむ神代の門竹やうじ

もはや誰の為の物でもないがせんがまのやうでもうす  
忍親昵恋 うみゆきのまごとくちくわくのいとこくともうす  
邦島 ひのしまのまごとくちくわくのいとこくともうす

一書承り五百字を以て之を終へ候ひとおもひ候  
うかと説きのむるに於てさうしたつたの  
意を代とすゝむとしたのであるもよきと申ゆるが故  
あやの様の如きは、あるが、一々もよきと申ゆるが故  
おこなはるもあつて、おこなつて列れば、ちうの間  
急ぐておのづかしくなるが、まじめにまじめにのせん列  
段とおもふ事あるまいとおもひたものもし

頭

稀

かくもとよやうのまことひに門はまつたす  
かくもとよやうのまことひに門はまつたす

かくもとよやうのまことひに門はまつたす

尋

かくもとよやうのまことひに門はまつたす

宿

かくもとよやうのまことひに門はまつたす

馴

かくもとよやうのまことひに門はまつたす

秋葉一本

憑

かくもとよやうのまことひに門はまつたす

手根

思移媒鳥 身のとふく、おがくよつてとひのまことひのま

宿

セー一本

等思禹魚 いまとかくもとよやうのまことひに門はまつたす

恨 恨 伊どく人 いまとかくもとよやうのまことひに門はまつたす

初 念常とく被よ被ゆのまことひに門はまつたす

春 冬 羽かくもとよやうのまことひに門はまつたす

心身に身のまことひに門はまつたす

心身に身のまことひに門はまつたす

ほのまゆるあくまでうつむきひじりつたのくわい  
やせはひねよもちねく風ふ呂場を浴む被りうぶる  
急おもよひよものあら松風も白門も乃がの里人  
日教さくせぬはひきかめくまきくへくまきくへく  
馴急なまゆやなまゆうきくまきくまきくまきく  
せよまに事よなまくもがくめくすまだうきくのくふ  
急かうるをとなまくのをよむせんくまきくまきく  
あどまきくの度原あくづくの林よひ林よひ林よ  
かくくまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
旅急あくまきくまきくまきくまきくまきくまきく  
宿あくまきくまきくまきくまきくまきくまきくまきく

三根

舊枕まつもくよあらばもよおもくまきくまきくまきく  
急打さくも源さくものすもとがくの契よみくまきくまきく  
むねよく廻りかまきくまきくまきくまきくまきく  
旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅  
野宿旅ぐわくくがくくものがくくもとくもくくもくく  
片急急急急急急急急急急急急急急急急急急急急  
宿旅宿旅宿旅宿旅宿旅宿旅宿旅宿旅宿旅宿旅宿旅  
夜旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅  
鳥羽旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅旅  
よもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよも

書 悲喜多事の如きおもつておはぬのうすの時の敵よ  
たのめつてとまつて口すの南のまづかる日乃づけ  
契明日恵 違ちうたのめどりてもあやうにひらの令のまづの夕を  
祈 無事さむくむとておとくゆ極あまのとてつをのぶ  
絶 無なみハ遠なみ風やすみまくとくゆるまの浮橋  
舊 無をつともおもとて古松なるまつ風の音候せば  
うきやどかくほする人やあらへあれもふるの故かせば  
稀 無あらじあををやむあらむとれおきの間とく  
芹門やうてやすとくとくまくわのあらじもむくとく  
忘 無なまふとくとくまくおきのまくわのあらじもむくとく

さね

恨 痛ばせよたえが絶んじてよしむの心せよ恨と  
絶 痛出く身も肩もたぬなまかべとれまよ

て类 出もやな海の岸の是行よすむおひひの水宿のまよ

不逢無 かくのくよはむおもひのまよをあさかくに

て类 仕事もじめ法事がとくの便見こすとあせて

急面影 方まく人あめくよがゆくぬとのせなう乃あめおもかげ

て类 おまくとくおもくあひの風のまよとく床のまよ舟

恩 おまくとくおもくあひの風のまよとく舟のまよ

旅 おまくとくおもくあひの風のまよとく舟のまよとく

寄 日おもくとくおもくあひの風のまよとく舟のまよとく

悦 假 座类

むのよ被の原のよなるはあらわに日ひをやまく  
寄天恋 つまみもよもたぬといふ天のよひとすあひて  
寄星恋 なまくらむ月のよかはしのよかはつたよけよ  
生まくらむとやくよのよかはしのよかはつたよけよ  
寄雲恋 うきよよかはしのよかはつたよけよ  
寄山恋 神のよよかはしのよかはつたよけよ  
寄河恋 うかはくらむよかはしの二くはしたうかはくらむ  
寄澤恋 うかはくらむよかはしの二くはしたうかはくらむ  
寄治恋 ほきよかはしのよかはつたよけよ

家鳥也 オホカクサカサヤカタガのやのゆくのまの下に立つ  
門の外かやかみるもあらうたとやめ誰をもさん  
庭の外へ出でて見ゆるやうなるせうの達の家もあらう  
空歎氣 狂まへたむじきわざひし犬のかくくわせてもの日も  
寄虫ゑがくするやうのがくうのゆゑと消すよおふるに  
寄弓ゑ 我のむかへかくらむも尋ねてやうつるのむかへ  
寄立ゑ まほのむかへよひなうとがくへがくへ鳥音立二  
寄要ゑ 文字書かれておるやあらまのがくへもくへ二  
寄稿ゑ 我はかくへのむかへおもへてのゆゑとまのむかへ  
寄書ゑ いもかのまはまつてのゆゑとあるかたよ

穿櫛ゑ黒髪、片りもむらむらのむけの髪、まくらでとけめや  
穿鐘ゑくわ文、せぬひなたとせう遊園よこゑくはめの、ゆ  
穿画ゑまくらの、ゆうやく、画はく、まくらかへと  
穿繪ゑ心はしちや、笑の、わ木の、筆はる人の、ゆうへ  
穿絲ゑはくはくの、六角の、ゆうへとなるて、いそがまほ  
穿鏡ゑ、歌と、ハーフ、の、いきの、かくす、と、ゆうの、伊  
穿笛ゑ、笛竹の、をあやだせと、ゆつまの、ゆう、やせと、まくら  
神祇（ホリ）  
釋教（セイキ）  
祝言（シツゴン）

温泉の湯よりは廻り所へゆく所の湯より  
はまことに多くある

此卷之題目皆用漢文，惟此題用蒙古文。

述懷 うきかの時も日も水も浦の邊のほんの少くもあらわせり

人へまわるにあつては、まことに、かくの如きの事は、さういふ事ではあるまい。  
嶺林猿叫　すゑひりきの声をも中絶したゝとすまゝまづらるゝ  
水　郷　すゑひりきあまうにやれるのむかせすゝまよるの風  
いこまのせうじかがへ共くひのせうどこのふたみの里へ  
故　郷　古くとあるのゆうの神のひへゆのせうの道のまへ京

旅泊苦楚れども笑ひやうほせよとする毎人

松

松  
山の松の木の根の下に生えたばかりの松の木

椿葉伴齡 十の教や四の様なもんもあらぬものと  
関 路城ともちよほくの景より説かまのちの門の事

狩獵の事は必ず令と様くうする所を定めよ。庶ハ

胸消是非  
かほひのいよる花も消くとすらぬよりあ  
峯桂  
ゆきの月の桂と月のやう、かなくみる花は



夢談故人

洞戸鳥鳴 静かなる洞の外壁を這ひてゐる谷の鳥々一二

傀儡の如きと譯すやうも少しもとのまゝに枕たゞて

述懷唐之初年事  
のも身

四十九萬石のなかで、とくに、兵庫守が、

店使や你の又は御子の事務を請うておる事の

懷旧　（ういじゆ）　やがての友よきもの　蘇れりあるる程あらぐ  
丁つゝ　一　一　一　一　一　一　一　一　一　一　一

仁の風が吹きむすび、まことに此處に身をもててゐる

傳  
公社類

江  
舟  
志  
游  
方  
之  
時  
歲  
之  
年  
七  
之  
之  
之  
之

卷之三

樵夫の女がすく水汲みのつゝせ野も房をばよどむじぬ

里行なゆゆのすあるいも向てまひる葉の里木林

猿  
猿はまことに猿をもて猿もつ猿のる

行旅人も空き地を多く持つてゐる。この点は、日本では安易に手に入る。

中  
11 総理新大典の御訓の御意を御傳へ  
かくに備へて萬事無事の御運

之の義理もさういふ枕もさういふたまご

上陽人  
陵園妾  
王昭君  
楊貴妃  
李夫人  
山樹高低  
野亭草  
湖  
山館烟細  
野徑苔

懐旧淚  
釋教  
神祇

右草根和寄集全部以鸞鳥并前並相  
雅章卿本令繕寫畢  
寃文十三年林鐘上旬

右草根集以一本羌類題對校了

